入選作家のひとりごと(順不同)

浅川浩　　ミーアキャット17　　(みーあきゃっと じゅうなな)
ミーアキャットは、必ず何頭かが見張り役となり、外敵を警戒するという、群れを組んで協力し合う高い社会性を持つことで知られている。しかしその直立する様はとてもユニークであり、警戒姿勢というよりも、仲間と一緒に明るい未来を見つめているようにも見えた。ミーアキャットと一緒に明るい未来を感じていただきたい。

浅川浩　　ワシミミズク　～着地～ (わしみみずく　～ちゃくち～)
ワシミミズクは、フクロウ科に分類され、フクロウ科の中で最大級の鳥類である。今回は、着地直前のワシミミズクの母親と、母を待つ子どもの様子を表現してみた。人間の約5倍とも言われる非常に強い握力と鋭い爪を持つ猛禽類ではあるが、子どもを絶えず思いやる母親のやさしさの面も同時に感じていただければと思う。

有賀也寸志　Alice2026(可憐な妖精) (ありす2026(かれんなようせい)) Alice2026(ALovely　Little　Fairy)
木彫で人物を制作してます。10代後半の女性の様々な表情を表現しています。

安ちか子　　天水落下　　(てんすいらっか)　waterfalls from heaven to earth
″大きな自然の循環の中で人間もまた生かされている一つの生命体であることを、忘れたくない″

伊佐一　女性肖像 (じょせいしょうぞう) Portrait of woman
また首を作りたいと思いました。

板垣信道　モングラマングラ(覚醒への予感) もんぐらまんぐら(かくせいへのよかん) To Mongura Mangura (The Premonition to Awakening)
世界が始まった時の、始原のエネルギーとでもいうものに想いをめぐらして彫り続けた。知人から楠を伐採するという話をもらい、見に行った。あたりの景観の中心となって楠は立っていた。入手し、生活の近場に置き眺めてきた。木の中に眠る根源の力の痕跡に触れながらノミを使った。木のぬくもりと楠独特の香りとノミに伝わる感触に満たされ、時に、稠密な時間が流れた。

伊藤理吏子　　胞 (ほう) cell
無数の小さな存在が、集まり、連なり、ひとつの形を形成する。個として存在していたものは、他者と結びつき、新たな形態へと変化していく。「胞」という言葉が持つ、生命を内包するものという意味から、内と外、個と集合、生と増殖の境界を捉えた。

稲葉草平　　ふたり(ふたり)Two
実体と空間の鬩ぎ合いから生まれる確かなフォルム。無意識の領域にある自我が形作るフォルムの追求は、私の創作の根幹にある。本作では、二つの身体構造を幾何的な絡み合いとして再構し、私の目標である造形の本質と考える、複合するフォルムが生む時間的な空間性と、抽象化された形態の響き合いを探った。人物から離れた形態も、彫刻上の造形的探求から導かれた必然の答えである。

浮田麻木　　風の軌道'58 (カゼノキドウ'58) orbit of the wind
螺旋を描き吹きすぎてゆく風の軌道を枝や古木材を組み合わせ動物の形態にて表現した。

内田千佳子　交響のきらめきに、魅せられて(こうきょうのきらめきに、みせられて) Captivatedby the Symphony's Radiance
私が人物の彫刻を作る時は、テレビのドキュメンタリーで出会った人からインスピレーションを得ることが多いです。今回も、ある音楽評論家の、音楽を心から愛する姿に強く心を動かされました。オーケストラの幾重にも重なる響きと、楽器が軽やかに奏でる旋律の交錯。その魅力に心を奪われ、それを表す言葉を探し続ける、純粋で思慮深く、夢見るような眼差しの美しさを彫刻で表現したいと思いました。

大谷実佳子　コタンコロカムイ(村の守り神)(こたんころかむい(むらのまもりがみ)) The God Of The Village
北海道の絶滅危惧種シマフクロウはアイヌ語で『コタンコロカムイ』と呼ばれ、夜行性で村の近くに巣を作ることから、夜間に村を見守り人間を助け導く存在として古くから大切にされている。人と深い繋がりを持つ賢いフクロウの姿を表現してみた。

大谷実佳子　しろくぬれ (しろくぬれ) Paint It White
白い粘土で作った塑像に白い釉薬を掛け焼いてみたが、思ったほど白くならなかった。そこで胡粉を塗ることにした。どうもピンとこない。更に塗り重ねた。どんどん塗っているうちに止まらなくなる。今度はやめ時が分からない。いくらでも足し算できる気もしたが、もしかしたらやり過ぎなのかもしれない。仕方ないので「完成」と言って手を止めた。

大塚高司　祈り 2026 ①　(いのり 2026 ①) prayer 2026 ①
風の中を歩く巡礼者

大西求　「結び―26」(「むすび―26」)「BIND」
ふたつのかたちあるもの(量塊)が出会い繋がり、むすぶことで、新たな命ある空間を生み出したい

初入選 **大山彩恵　　ゆきどけ　（ゆきどけ）　yukidoke**
色々な人に暖かい、柔らかい気持ちになって欲しくこの作品を作りました。ゆきどけとは、春になって気温が上がり、冬の間に積もった雪が溶けることを指すのですが、私はこれを心情に落とし込んで、日々何かしらのプレッシャーを感じるような現代にこの作品を見るとゆきどけのように冷たい雪、緊張の糸が解け、春のような暖かさ、温かく優しい心になって欲しいと思いこの作品を作りました。

岡崎恵　　犬　（いぬ）　　inu
柴犬が好きで過去2回ほど飼いました。結婚してから家族全員猫が好きで、猫しか飼えません。私の楽しみとして玄関に置こうと思って作りましたが行きつけの美容院に飾る事になり、お客様に可愛がられています。美容院の人には、東京へ散歩へ行く事になるかもしれないと告げています。

岡田杏　　白日夢　　（はくじつむ）　　fantasy
庭の自然木や木板といった物質そのものの質感や形の発生を生かし、人体を簡略化した『白昼夢』という空虚な幻影が立ち浮かんだ。腕の自然木からは有機的な繊維の様子を感じ、また、郷里・鴻巣のひな人形が持つ静謐な佇まいを意識した。生の素材と伝統の記憶を交差させ、観者の想像力を喚起する不思議な像を目指した。人工的な金属構造物を骨格に、新たな自然生命が発芽しているような様子が気に入っている
岡田杏　　花の記憶　（はなのきおく） Flowers of Memory
テラコッタと自然木を用い、焼き物本来の素肌感を生かした。胸部には地元の「花まつり」で親しんだポピーの花を土器のように線刻し、薄く彩色した。「花まつり」を初めて見たのは最近の事で、子供の頃は見る事のなかった焦燥感が現れているようだ。生まれ育った土地の空気感や質感という自身のルーツと向き合い、造形に対する「自然さ」を導き出すことを目指した。土の素朴な質感と自分の心象風景を交差させ、物のあわれや独自の佇まいを表現した

荻野和彦　大地の記憶（だいちのきおく）　Memories of the Earth
単なる老人像ではなく、「時間が人の姿を借りて立っている」姿として、人間が長い時間を生き、その存在が風化しながらもなお立ち続けている、そうした時間の堆積を表現したかった。

小口偉　　かさね ― Layers（かさね ― レイヤーズ） Kasane - Layers
「のせる」「つみかさねる」という行為に感じる、スリリングな均衡の形をつくることを意図した。形の重なり合いは、全体として大きな造形に変化していく。重ねることによって生まれる不安定さと、そこに成立する美しさを表現しようとした。

柿崎賢治　蓮の花（はすのはな） HASNOHANA
中学生の頃からアルバイトをしていたのですが、学業とバイトの合間をぬって、夏休みは毎日自転車に乗り近くの海に行って泳いでいました。息が切れたら海から顔を出して、お腹が空いたら潜ってアサリ取りをしてという、自然体で過ごすうちに海の偉大さと、ありのままでいることの大切さを学びました。水の中という果てしなく深いところから陽の光を求めてありのまま咲き誇る蓮の花の様に、私自身を投影した作品です。

鹿之助萬藏　　土楼　（どろう） Fujian Tulle
中国の福建土楼の形に強く惹かれた故の個人的な土楼のイメージ

唐木和美　内なる地平（うちなるちへい）　Inner horizon
ダンサーであるモデルの、美しいデコルテと背中の印象をかたちにしたいという思いから制作を始めた。肩まで含めた少し大きめの首像にして、身体の流れや存在感をより豊かに表現することを目指した。モデル本人は華奢な体つきであったが、内面に宿る確かな強さや存在感を感じ、それがタイトルにもつながった。彩色には岩絵具を用いた。試行錯誤を繰り返しながら色を重ねたことで、仄かに複雑な肌の色合いが生まれたと思う。

川崎知子　　揺蕩う領域　　（たゆたうりよういき）　　The Domain of perennial Flux
定まらない美しさ、永続的な揺らぎは一瞬では終わらない特別なもの。

吉良幸弘　　丹生　　（にゅう）　NYW
「見たまま作りなさい。」と恩師の言葉から、その言葉の謎を解こうと、「具象彫刻と人体彫刻とは？」と自らに問い返しながら、制作を日々継続している。今回の人体制作は、具象的な観点で観察し、「女性が、前に向かって前進しようとする決意を作品に表現することができた。」と、作家自身の印象を強く制作を重ねるたびに感じられるようになってきました。まさに「丹生」という作品名に適した具象作品となりました。
吉良幸弘　若いもんには負けまへんで！2（わかいもんにはまけへんで！つう） NEVER GIVE UP！ WITH YOUNGER. 2
高齢化社会に向かう現在。常に健康で活力のある社会生活を望んでやみません。作家自身も毎年年齢を重ねるたびに、気力・体力も若い頃のままで『若いもんには負けず頑張りたい。』そのような願いを抱いています。今回は、集成材で頭像を表現する制作を行いました。最初のオリジナル作品は、塑像で表現しましたが、今回の作品は、「桂材の集成材による寄木彫」で自然に優しい素材を用いることで、「踏ん張る高齢者」を制作しました。

蔵本保広　月夜路　（つきよじ）
自然の中に生きている私

黒田耕嗣　私が消えた日, 1945, 8月 （わたしがきえたひ, 1945, 8がつ） The day I was eliminated, 1945, August
終戦の日を迎える度, 終戦の日が8月15日でなく, 7月15日だったら,8月6日, 9日に起った悲劇は避けられたのではないかと, いつも思ってしまいます.何故, もっと早く終戦に至らなかったのかと,残念でなりません. この作品は, 1945年, 8月に起った悲劇を私なりに表現したものであります.

初入選 小林晴哉　黒猩猩 （くろしょうじょう） The chimp
“猿”を侮蔑の語彙として扱う人間に対して

坂元絵美奈　グレイ(ぐれい)Gray
白黒はっきりさせる、という表現をよく耳にしますが、人とはどちらにも分けられないグレイな存在なのではないかと考えています。今回の作品を作るにあたって、人というモチーフを扱う人間として、人の曖昧さ、グレイな部分を肯定する作品を作りたいと思いました。

初入選 桜山明空　スクウィーズ・ミー （すくうぃーず・みー）
ジャズの名曲「スクウィーズミー」から着想した作品で、愛し合う男女が、絞るように抱き締め合う姿のフォルムです♪　こんなふうに愛し合えたら幸せでしょうね ～ !! (^_-)-☒

初入選 笹下悠奈　愛しいかたち （いとしいかたち）　asleep
文鳥が背眠している姿を大理石で作りました。安心を感じて眠りにつく文鳥の姿をずっと愛でていたいと思い、自分が永遠を感じる素材である石で制作をしました。

佐藤邦子 Woman 希望　（ウーマン きぼう）　Woman Hope
希望に向かって前進しようとする女性を表現しました。

さわべともこ　真夜中の向こう側 大地の慟哭 （まよなかのむこうがわ だいちのどうこく） The Other Side of Midnight: The Lament of the Earth
大地から発せられる叫びは地球を覆いつくす。争いは繰り返し続き、大地は取り返しのつかない傷を負う。大地は裂け、地割れ、陥没、隆起する。まだ気づかないのか、、、阿鼻叫喚な世界が待ち受けてるとも知らず、終末時計は85秒を示している。邪鬼はのさばり闊歩し、腐海の底を封印してしまう。平和は遠のき、浄化されていない空気が漂うばかりだ。

清水尚土　え!? （え!?）
家の中でも外でもあまり声を張らない、声の通りの悪い妻の第一声に対しての僕の聞き返し率は多分70%を超えるだろう「？」クエスチョンを「！」ビックリマークで飛ばす　どこか遠く離れた星の何者かが僕の「？」をキャッチしてくれるだろうそれにしてもなぜ聞き返した時の人の表情はそれぞれ個性的で、滑稽なのだろうそんな滑稽な表情を半永久の形にした

高田まり子　わたしの見たこと　わたしの見ること （わたしのみたこと　わたしのみること）
視線のしっかりとした彼女はモンゴルから来たといいました。彼女は故郷でどんな生活だったのだろう。これから、どんなことを経験していくのだろうかと思いながらつくりました。上部の顔は将来への意欲を表すためにくっきりと、下部の胸元辺りは今までの道程または待ち受けるかもしれない困難をイメージしてガサガサとしたタッチを残しました。

高山和雄　Nさん （えぬさん）Mr.N
首像の中に、形の強さ、かたさ、やわらかさを意識して作りました。

多田裕　座る　（すわる）　Sitting
座っている女性の形を表現しました

田中誠　Nocturne Solitary （ノクターン・ソリタリー） Nocturne Solitary
素材は羊毛です。彫刻は素材による意味合いが強いです。羊毛を使うことによってより心の深い部分や繊細な部分を表現できると思っています。

田村考平　エムセカンド （えむせかんど） M—second
色による物体の存在感を強調してみた

仲田耕治　狙う　（ねらう） Eyeing its prey
虎が獲物を狙う時の緊張感、威圧感を表現したいと思いました。

成清紳助　　構造と形態2026A　（こうぞうとけいたい1956ー）
4角柱を螺旋状にするため、ある螺旋曲線を設定しそれを心棒とする4角柱の接続面を計算し、そして各角柱をつなぎ曲柱とした。できた曲柱3本を綱のように構成した。このせいさくのコンセプトは、「計算し緻密に構成された形態は、緊張する」である。

初入選　二階堂杏里　　凝集（ぎょうしゅう） agglomeration
ミクロの世界に存在する、流動体の密度の高い集合体をイメージし、微細なものが集まり、一つの形を成す状態を巨大化した立体として表現した。個々の形が密集し、互いに影響し合うことで生まれる、集合体としての美しさに着目している。表面に生じる無数の隙間や有機的な形態によって、流動しながら凝集していく様子を表現した。

西井武徳　　vanishing point ' 26（ゔぁにっしんぐ ぽいんと） vanishing point ' 26
素材から作品が、立ち上がる瞬間をとらまえたような制作を目指しております。

野口茂夫　　DIGNITY　（ディグニティ）　DIGNITY
動きのある裸婦を中心に制作してまいりましたが、今回は表面的には動きの少ないポーズの中により繊細な動きを見出し表現する事に努め制作致しました。

初入選　野々山勝彦　　風の風景（かぜのふうけい） scenery of the wind
少し高いところにある層をなす遺跡のような場所をイメージしました。そこでは、高い場所の為、さまざまな風が通り過ぎていきます。そんな場所やカタチをイメージしてみました。

長谷川慈音　　音楽家Bの肖像（おんがくかBのしょうぞう） Portrait of Musician B
インダストリアル・ミュージックの先駆者、ブリクサ・バーゲルトの肖像。硬質な石を工具で削り出す行為は、彼らが金属音を音楽へと転換させたプロセスと重なる。モルタルの台座に乗せることで、その無機質で力強い世界観を強調した。石は「地球の骨」であり、音を最もよく伝える物質だ。この作品は、石という沈黙の物質に、鋭利な音楽的エネルギーを封じ込めた試みである。

長谷川慈音　　凝固するpunks（ぎょうこするpunks）　be tight
この作品はブロンズという素材が持つ、1000度を超える熱で溶け、冷め、凝固するというプロセスを、Punkムーブメントの爆発的な熱量と、その後の急速な収束、そして張り詰めた「be tight」な精神性と重ねて制作した。俯き、倒れかけるその姿は、暴動の後の疲弊ではなく、熱が冷め、凝固していく瞬間の、物質と精神の静かな変容を体現している。

早川省　　去り行く時との対話（さりゆくときとのたいわ）　A Dialogue with Passing Time
道端に朽ちた黒い羽根　　雨の降る夜更け窓を掻くかすかな響き　　何かを背負った蛙それから幾夜となく　訥々と語りやがて跡形もなく溶け去り行く

平中和美　　記憶の積層（きおくのせきそう）　Layers of memories
木、流木、野焼き陶という異なる時間を刻んだ素材を融合し、己の人生の中で積み重なった記憶の層を造形化した。球体は自己の象徴である。過去と現在、葛藤と安らぎの狭間で揺れながらも互いに支え合う3つの要素によって存在している。素材が持つ傷や質感、時間の痕跡を生かし、記憶は過去ではなく、現在を支え未来へとつながる力である姿を表現した。

初入選　平野紗葵　　同調（どうちょう）
見ざる、聞かざる、言わざるから着想を得て制作。悪しきことや人の欠点・過ちを見ず、聞かず、語らずに生きる事は、平和に暮らすための教えであり、1つの処世術である。しかし、それが行き過ぎた先には何があるのだろうか。

初入選　PEREZ MATABUENA HANNIA　301部屋（さんまるいちへや）　Room 301
愛とは何だろう？あるいは、愛ではないものとは何だろう？」素直に気持ちを表現することが弱さとされ「先に好きになった方が負け」と言われるような価値観の中で、私たちは本当の気持ちを隠してしまう。愛は時に痛みを伴うが何より自分自身に正直であることから生まれるのではないか。本作品では、すべてを差し出しているように見えながら、実は自分の気持ちを隠すことで幸せになれない姿を表現した。

初入選　前地李華　　微光（びこう） Glimmer
自分がどうなりたいかを考えたときに、周囲を明るく照らせる存在になりたいと思った。暗い海を自身の発光で照らすホタルイカは、自分のなりたい姿と重なりその思いを込めて制作した。海の中にある輝きを纏いながら力強く泳ぐ様子を表している。

槙あさ美　　対峙（たいじ）　Confrontation
オスのライオンが縄張りに入ってきた他のライオンと戦おうとして様子をうかがっています。時にはちゃんと向かい合わないといけない場合もあるという気持ちで制作しました。ここから飛びかかるか逃げるかはご想像にお任せします。

松川美喜子　　海の記憶（うみのきおく）
記憶は母なり 母は海なり強く 逞しく そして優しく。記憶を探る先に希望が見えてきた。寺の門前の張り紙にあなたが徒に過ごした今日は昨日死んでいった者があれほど生きたいと願った明日。と書いてあった。
松川美喜子　　堀内氏（ほりうちし）
厳しさの中に優しさあり 少しでも表現できていたら・・。

松原賢典　結の灯火（ゆいのともしび）　The Light Between Us
人は他者との「あいだ」において、自らの存在を知る。その「あいだ」には、言葉になる前の感情や欲望、ぬくもり、そして新たな生命の可能性が静かに宿っている。本作は、男女の関係性を題材としながら、身体の交わりそのものではなく、二人の「あいだ」に立ち現れる目には見えない存在を造形化した。身体を貫く赤い形態は、欲望であり、生命であり、互いを引き寄せ結び合う根源的な力を象徴している。私にとって「間」とは、空白や距離ではない。存在と存在が響き合い、互いを受け入れることで生まれる、もう一つの存在である。土という生命的な素材を通して、その目には見えない気配を形にした。灯火は、一人では灯らない。その火は、ふたつの存在が響き合う「あいだ」に生まれる。

松丸弘道　嵬（かい）Mysterious
登山家の間では、有名な難所で知られた切り立った一枚岩で通称だが「鬼」という字が含まれる場所がある。若い頃から惹かれていたが、ある冬の雪崩が多い年に遠くから見上げる機会を得た。「嵬」の意味は「傾斜が急であるという意味がある。怪しいという意味もある。この漢字がぴったりだったのでタイトルとした。「鬼」は恐ろしくもあり、どこか悲し気に思える。その場所をイメージして山への畏怖と憧れを軸に制作した。

松本淳児　　遠くに、近くに（とおくに、ちかくに）　　faraway,nearby
人の思いに触れる中で、その人の『ふるさと』を知ることも多い。単に出身地というだけではなく、出会った人や心震えた経験など、様々なものが『ふるさと』になる。いつか帰る場所でもあり、めざしている目標でもある。思いを馳せるだけで心が落ち着く。そんな『ふるさと』みたいな作品をつくりたいと思っている。

初入選　松本千夏　甘露（かんろ）　KANLO
横たわる人という形の面白さと「甘露」とポロリと口から出た幸福感を石に現したいと思いました。彫刻の視覚的な効果と触覚的な効果の関係性について知りたいと思っています。自分が気になることをきっかけにその関係性を探究する制作を続けたいと思います。

見田雅美　夜（よる）　Night
20年程前に描いた落書きを見つけ、それを形にしようと思いました。束になった繊維状のものが、波のように押し寄せてくるイメージで、言葉にならない鬱鬱とした気持ちだったのだろうと思います。それを言い表す言葉として、「夜」というタイトルにしました。

宮田瑞稀　猫のゆりかご（ねこのゆりかご）cat cradle
眠る猫の姿から発想をえて制作しました。寝ていても耳は警戒し、世界を感じとっています。鉄板を切り重ね溶接する過程で現れる「そこにいる存在」を大切にしています。見る位置によって変化する姿に動物の存在感をあらわせれたらと思います。

初入選　森田実穂　眸化生 ― 愉 ―（ひとみかせい ― ゆ ―）
この作品は、眸をテーマとし制作している。私は「眸」に対する「球体」「人体の一部」といった表現に疑問を感じている。果たして「眸」は、人体に組み込まれたただの球体なのだろうか。人間は会話する際、感情を読み取る為に「眸」を視る傾向がある。それは「眸」の動作に人の心情が顕著に現れるからだ。その動作に統一性はあれ、その時の心情や受け手によって捉え方は異なり、正解は無い。動作自体は球体で行われているが、私は「眸」はただの球体ではないと考える。人間の心情は「眸」に現れ、人は「眸」から誕生した心情に比例し形を成した新たな生物を目撃し感じ取る事で心情を読み取る。その生物は仮想的存在であり正解の形は無い。この見解・疑問を基に、「眸」から誕生した生物を三次元に起こし、互いに認識した際に生じる隔たりやそれらが人や社会に及ぼす影響や人の面前に未詳な生物が存在するという視点・発想を人々に伝えると同時に、他者の着目領域の展開、発想の飛躍を共有し人々に気づく機会を与える事を目的とし制作した。
「眸化生 ― 愉 ―」安心や楽観、愉快といった心情で今にも飛び出し踊り出そうとする「眸」を表現。

八木虫三　ブーツの子ども（ぶーつのこども）
新子どもの無垢でこれから何にもなれるという希望を表現しようとしました。また強調と省略をし、小さいけれど空間に強い存在感を出したいと思いました。
八木虫三　**コートの少女（こーとのしょうじょ）**
今は会うことの出来ない子供の姿を想像してつくりました。セメントの素材の強さや素朴さ、路傍の石仏のような感じを表現したいと思い制作しました。

初入選 **楊小波　　近現代彫刻史（きんげんだいちょうこくし）A History of Modern Sculpture**
《近現代彫刻史》は、一冊の美術史書を出発点とし、「読む」という行為を、素材と歴史をめぐる彫刻的経験へと転換しようとする作品である。《近現代彫刻史》という書物を開くと、近現代彫刻の展開が、ある意味では石材、木材、そして青銅鋳造をめぐる歴史でもあったことに気づかされる。本作品では、この三つの素材を用いて一冊の「本」の形態を制作し、文字や図像を収める読書の対象であった実際の書物を、重量、質感、時間性を備えた彫刻的な物体へと転換している。それは、実在する書物に対する隠喩であり、同時に置換でもある。

横田昌明　ほたる（ほたる）　Ho-Ta-Ru, or Fire-flies above Shirakaha-burn
祭りが近くなると色濃くなってくる町の高揚感とは対照的に、静寂のなか、ほたるかに点す小さな生命のひかりの無常観や浮揚感を、それをみつめている女性の表情(とくに横顔の)をとおして表現してみたいと考えました。
さよふけていよよかそけきしらかはのみきはにともすいのちあるらしの仄

横山普美　波音 2026　夏（なみおと 2026　なつ）Sound of waves 2026 summer
静かな夜に響いてくる波の音から、果てしなく続く人生の厳しさのようなものを太平洋の大きさに感じる。誰もが日々様々な荒波にもまれながらも家族と共に支え合い前向きに生きているのだろう。浜辺に落ちている貝殻の螺旋、空洞など波によってできた表情と、家族を思う女性像を形を省いたり削ったりして一体化し、波音を表現した。